

第5回～方法論I：客観的データなどありえない

前回の復習

多義性と作者の死

- ▶ 作者の死
- ▶ 「制度としての作者は死んだ。彼の公民的、情念的、伝記的人格は消滅した。王位を失った彼の人格はもはや作品に対して恐るべき父性を発揮することはない」（バルト、前掲書、pp.51-2）
- ▶ 作品（≒テキスト）は、作者の勅ではなく、様々な他のテキストの引用で構成された織物であり、その意味・価値は読み手の解釈に委ねられる

テキストの多義性

- ▶ デノテーション（明示的意味）：言語記号が直接指し示す意味→普遍性を持ちやすい
- ▶ コノテーション（暗示的意味）：言語記号が暗示する意味→文脈によって意味が変わる

神話

- ▶ 誰が「作者」なのかがもはや問題とされないうまま、人々の間で信じられていること
- ▶ レスリングや自動車、演劇、石鹸、ピフテキ、テレビ、都市、流行など、現代社会の「神話」を分析

ネット文化

インターネットがもたらしたもの

- ▶ ブロードバンド回線普及（2000年以降）に伴い、画像・映像・音声を使った多様なサービスが利用可能に
- ▶ インターネットの特性：助け合うこと・自由であることを非常に重要視

インターネットとコミュニティ

- ▶ 掲示板（BBS）
- ▶ ブログ
- ▶ ソーシャルネットワークサービス（SNS）

CGMの可能性

- ▶ CGM（Consumere Generated Media：消費者生成メディア）
 - ▶ 権威的な「作者」ではなく、消費者が内容を生成してゆくメディア→まさに「作者の死」である！？
- ▶ Web2.0（米メディア起業家、ティム・オライリーが提唱した言葉）
 - ▶ 「生活者が主体的に」欲しい情報を探し求める→データベース消費の一形態と考えられる

インターネットと公共圏

- ▶ 2ちゃんねるをはじめとするCGMにおけるデータベース消費（自分の関心事項のみ肯定するようなネットの使い方）は、インターネット開発当初の民主的な意見交換の場という理想とは乖離している

ケータイ

音声通信（電話）から文字通信（メール）へ

- ▶ 携帯電話の使い道
 - ▶ 通話が66.8%、メールが100%（インプレス編『ケータイ白書2006』）
- ▶ インターネット接続
 - ▶ ネット経由のサービスについて、「PCを使う人」と「ケータイでなんでも済ます人」が分化

二つの思い込み

- ▶ 日本市場の特殊性（ガラパゴス化）→若者と文字コミュニケーションの普遍性
- ▶ ケータイ依存の若者は「不良」、「下流」（警察庁の調査）

ケータイ依存と友人関係

学生アンケートから

- ▶ 2006年12月から2007年1月、首都圏・関西圏の複数の大学で学生424人を対象に行ったアンケート調査のうち、携帯電話を所持している学生の回答を分析（鈴木、前掲書、pp.119-23）
 - ▶ 一日あたりのメール送受信件数が10件以上（46%）
 - ▶ 友だちのメールにはすぐ返信する（58%）
 - ▶ 一日なんども着信を確認（43%）→常に待機状態におかれている
- ▶ 全体の14%が、上記全てに「あてはまる」と回答
- ▶ メール送受信件数の多さと、上記それぞれに「あてはまる」学生とのあいだに有意な相関関係

キャラ切り替え志向と孤独・孤立不安

- ▶ 「自分が孤独だと気づいてしまうこと」を回避するためのケータイメール
- ▶ 一人ずつまんないからメールするのではなく、一人ずつまんない状態になりたくないからメールする
- ▶ いつでも誰かと繋がっていたい、繋がりを維持し続けておきたい
- ▶ 孤独を避けるために他人に同調することが、かえって孤立に対する不安を生む」というジレンマ（p.124）
- ▶ ケータイメールを頻繁に使う若者の多くが、友だちとの密接な付き合いを求め、新しい友だちを見つけたいと思っている。しかし交友を広げようとすると、キャラを切り替えて相手に同調しなければならない。

携帯電話によって人間関係が広がるほど、常に繋がりを維持し、メールにはすぐ返信するという振る舞いを維持し続けなければならない。それが、ケータイ依存を生み出すメカニズムなのではないだろうか？（鈴木、前掲書、p.125）

社会調査法～文化のなにをどうやって調査するのか？

辻大介（2008）「世代や世相の文化への視座～量的アプローチと質的アプローチ」南田勝也・辻泉（編）『文化社会学の視座』ミネルヴァ書房（pp.63-81）

文化社会学での調査とはなにか？

- ▶ 社会学とは？（初回講義のレジュメ参照）
 - ▶ 人間が（自分の意志で）社会を動かしているのか？⇔社会が人間の行動を規定しているのか？
 - ▶ 所与の人間集団（つまり社会）について、その集団への参与者（主体）も無意識であるような諸規則（客体）を析出し、その規則性の原理を明らかにする学問である
- ▶ 社会に出てデータを集めてくる。
 - ▶ 特定のある文化的事柄（テキスト）について、ただ単に自分がどういう価値観を持っているかを述べるのではなく、実際の社会空間のなかで自分も含めた人々がどういう価値観を持っているかを調べる
- ▶ 価値観の構造
 - ▶ その価値観にどのような規則性があるのか
 - ▶ その価値観を成立させているために、誰がどのような役割を果たしているか
 - ▶ その価値観を成立させているコンテキストの垣根がどう引かれているのか
- ▶ 社会学は「科学」であり、それゆえ客観的な分析を志す
 - ▶ 「客観的」とはなにか？
 - ▶ ぼく・わたしの見方や評価から独立し、普遍性をもった分析結果
 - ▶ わたしはテレビゲームが嫌いである→主観
 - ▶ 私の家にはゲーム機がひとつもない→客観

量的アプローチと質的アプローチ

	量的調査	質的調査
具体的方法	・アンケート調査 ・内容分析	・インタビュー調査 ・エスノグラフィー（フィールドワーク） ・内容分析
長所	まとまった数のサンプルを対象とし、客観的な全体像が掴める	特定の個人や小規模のグループについて、深く知ることが出来る
短所	全体像は描けるが、個々の事例についての分析は不可能	対象サンプルの全体での位置を把握しないと、客観性に欠ける

統計調査のやり方

- ▶ 仮説を立てる（小さな疑問を社会的に展開する）
 - ▶ 事実を問うこと以上に、理由を問うこと（教科書p.65）
 - ▶ （この講義で学んでいるような）社会的な一般知識を駆使して、調査対象の社会的文脈を考える
- ▶ 仮説を検証するためのアンケート（質問票）を設計する
 - ▶ 質問文の確定
 - ▶ 排他的な表現（自分にしか分からない言い回し）を避ける
 - ▶ どこまで数値化するか
 - ▶ 完全に数値化→【あなたの所有するCDの数は何枚ですか？】
 - ・母集団の数で割ることにより、一人当たりの平均CD所有枚数を算出することが出来る
 - ▶ 本来数量化できないものを数量化する→【このCDは好きですか？ ①とても好き②好き③どちらとも言えない④嫌い⑤とても嫌い】
 - ・数字は回答項目に便宜上振り当てているだけなので、平均値をとるなどの統計処理は無意味
 - ▶ 自由に回答を書いてもらう→【あなたの好きなCD5枚のタイトルを書いてください】
 - ▶ 質問の数を加減する
 - ▶ 質問の数が多すぎると、調査対象者が飽きてしまう
 - ▶ 標本（母集団）の確定
 - ▶ 全数調査
 - ▶ 調査対象となる人々全員にアンケートを実施する。
 - ・全員を対象とするため、手間がかかるうえデータ量も膨大になり、実施にはコストが嵩む。
 - ・国勢調査（日本に居住しているすべての人及び世帯を対象）
 - ▶ 無作為抽出
 - ▶ 「推測統計学」を応用し、全体のごく一部を調べることで、全体についての情報を得る。3000人程度を対象にすれば、日本人全体（1億3000人）についての傾向がわかる。
 - ・全数調査に比べ、手間もコストも圧倒的に少なくて済む。
 - ・その一方で、完全に無作為な標本抽出というのは非常に難しい
 - ▶ アンケート方法（回答の回収方法）
 - ▶ 面接調査（調査者が調査対象者に直接会って質問し、回答を得る）
 - ▶ 一人ひとり会って回らなければならないため、時間と費用がかかる
 - ▶ 直接会って回答を得るため、比較的信頼性の高いデータが得られる
 - ▶ とめおき調査（質問票を一定期間対象者に渡しておき、後日訪問して回収する）
 - ▶ 費用はかからないが、身代わり回答や無回答が多い
 - ▶ 郵送調査（調査票を郵送し、回答を送り返してもらう）
 - ▶ 費用はかからないが、回収率は3割程度
 - ▶ 集合調査（ある場所に調査者と調査対象者全員が集まって調査を行う）
 - ▶ 授業中のアンケートなど
 - ▶ 電話調査（電話をかけて質問をし、回答を得る）

- ▶ 固定電話の場合、個人ではなく、世帯が対象になり易い（日中に実施した場合、主婦が電話に出る確率が高く、年代や性別、職種等に偏りが出る）
- ▶ 回答の信ぴょう性に不安
- ▶ 電子調査（インターネット経由で質問票を公開し、回答を募る）
 - ▶ インターネットを利用できない人もいるため、標本に偏りが生じやすい
 - ▶ 同一人物が複数回回答することも可能であり、回答の信ぴょう性にも不安
- ▶ 集計方法
 - ▶ 表計算ソフトの活用
 - ▶ クロス集計：2つ以上の質問項目をかけあわせて集計する方法
 - ▶ グラフ化：視覚的に分析する

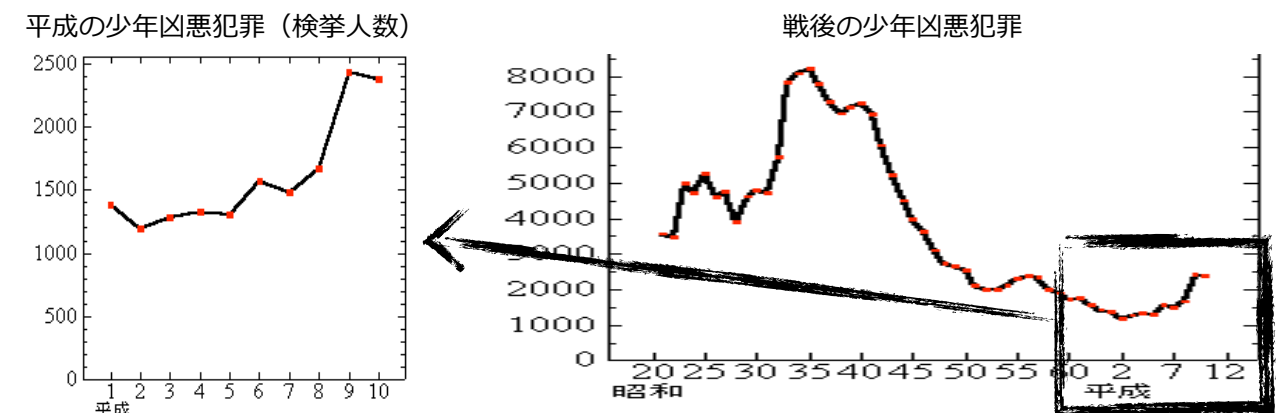
統計データのウソを見抜く

ウェブ版国勢調査

先月27日に実施された、インターネット利用に関するアンケートでインターネットの利用率が100%となっていたことが明らかになった。麻生総務大臣は「これは政府主導によるIT政策の効果の現れと断言していいだろう」とのコメントを発表した。調査したのは、総務省統計局統計センターなど。今年四月にネット上でアンケートを実施し、約二万三千人から回答を得た。（これは2ちゃんネタですが、なにがおかしいのでしょうか？）

少年の凶悪犯罪は本当に増えているのか？

パオロ・マツァリーノ (2007) 「第2回・キレやすいのは誰だ」『反社会学講座』ちくま文庫
 出典：マツァリーノ（前掲書p. 24及びp.32）
 戦後の少年凶悪犯罪



ケータイ依存の青少年は非行にはしるのか？

警察庁少年課 (2004) 『「青少年の意識・行動と携帯電話に関する調査研究」の概要』 <http://www.npa.go.jp/safetylife/syonen16/keitaityousa.pdf> (2010年5月17日アクセス)

- ▶ マッチポンプ状態
 - ▶ 「非行少年／少女」を自分で定義し、その解決方法も自分で提案する
 - ▶ 非行少年（女子）はケータイ依存症の出会い系サイト利用群であり、中高生のケータイ利用を禁止し、出会い系サイトを取り締まれば非行少年（少女）はなくなる、とでも言いたげな……
- ▶ 強引な（非客観的な）こじつけ
 - ▶ 携帯電話利用とはどう考えても直接関係ない要素を、あたかもそれが関連しているかのように提示する
 - ▶ 暴力感情・逸脱行動・マナー違反・地域社会との関わり……
- ▶ 「非行少年」と名指しされた少年・少女ひとりひとりの気持ちや動機は全く汲み取られず、すべての回答は冷酷に数量化され、パーセントによって表示されている

完全に客観的な調査はあり得ない。最終的には、調査する人の意識が調査の説得力を決める。調査をする自分の依拠する文化（コンテクスト）が絶対ではないことを意識し、それ以外のコンテクストの存在に敏感でなくてはならない。